

氏名	たか だ しげ おみ 高 田 茂 臣
学位(専攻分野)	博 士 (経 済 学)
学位記番号	経 博 第 285 号
学位授与の日付	平 成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	経 済 学 研 究 科 経 済 シ ス テ ム 分 析 専 攻
学位論文題目	19世紀ハンガリーの産業革命 ——ハンガリー資本主義像の再検討——
論文調査委員	(主 査) 教 授 今 久 保 幸 生 教 授 八 木 紀 一 郎 講 師 デ ィ ミ タ ー ・ ヤ ル ナ ヴ フ

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、19世紀ハンガリーの産業革命の特質を、著者独自の視点に基づく社会経済史、企業家史・経営史、技術教育史の諸側面から実証的に明らかにした意欲作である。本論文においては、一方では、伝統的なハプスブルク帝国史の枠組みに止まることなく、また、他方では、経済や先端技術の分野で世界をリードする国ではもはやなくなっている現代ハンガリーとの対比をも念頭に、ハンガリー近代史の独自のあり方を照射する姿勢が貫かれている。

序章では、18世紀オーストリアの内国植民地、食糧・原料供給地にすぎなかったハプスブルク統治下のハンガリーが、19世紀末に、西方ヨーロッパとの緊密な連関のなかで中東欧屈指の工業国となった経緯を明らかにするとともに認識関心が示される。その上で、ハンガリー産業革命の見取り図を示すかたちでこの経緯を解明し、これによって、後進性を強調してきた従来のハンガリー資本主義像を再検討するとの課題設定がなされる。またその際、これを製粉業・機械工業の企業者活動、経営戦略、高等技術教育史の諸相の分析を通じて検討する方法的手続きが示される。

第1章は、19世紀後半のハンガリー経済最大の工業部門であり、最大の輸出工業でもあった小麦製粉業の、とくにその中核をなしたブダペシュト製粉業の資本制的変革を解明する。これによれば、ブダペシュト製粉業は、1880年代末までに工場制度を確立させ、これによりハンガリーに機械制大工業を創出したのみならず、同国における(株式)会社制度の普及・発展にも貢献した。さらに同製粉業は、近代ハンガリーにおける主要大企業の地位を占め、オーストリア＝ハンガリー二重帝国時代を通じて産業資本の蓄積の要であり続けた。著者はとくに、ブダペシュト製粉業が近代ハンガリーの穀作農業大国の条件を活用してこうした地位を築いたことを、同製粉業の意義のひとつ、と見ている。

第2章は、ブダペシュト製粉業から派生した企業であり、後に、製粉業の飛躍的發展をもたらす製粉技術変革に最も貢献した、ガンツ鋳鉄・機械工場株式会社を対象に、その新旧経営責任者ガンツ・アーブラハムおよびメクヴァルト・アンドラーシュの企業家活動の性格を、「革新」性の観点から検討している。その結果、ガンツ社発展の礎を築いた両者が相前後して異種産業分野を対象に、技術蓄積に裏付けられた新製品開発による新販路開拓を敢行したこと、両者による革新が、企業家が市場機会に鋭敏に反応する型の革新であった点で共通していたのみならず、製造技術の核をなす冷硬鋳造法で相互に結びついていたこと、両者の革新はヨーロッパ規模の情報や人的交流の蓄積を前提としていたこと、が明らかにされた。

第3章は、いわゆる「第二次産業革命」期におけるガンツ社の電機事業戦略を、技術開発戦略と市場創出・資金調達戦略の両面から検討している。これによれば、ガンツ社は1880年代以降に本格的な事業多角化を志向し、その一環として発送電機器、電動機や電気鉄道といった強電機器の製作へ進出した。またこのことが同社を先端技術分野の有力企業に押し上げることになった。この興隆は、米独大手電機企業の強電分野への本格進出とほぼ同時期であり、したがってまたガンツ社は先発企業の一角を占める存在となった。同社電機部門の主要な戦略は、若い有能な技術者の確保による交流技術の採用と、発展過程で強化された銀行・外国資本との提携、およびそこからの調達資金によって実現した電機ユーザー企業(電力・電鉄会社)の系列化による企業力の強化であった。著者はここで、近代ハンガリーがガンツ社や合同白熱燈・電機株式会社

(TUNGSRAM)といった世界のトップ企業を国内から生み出したことを評価し、翻って先端産業部門で旧西側先進国企業の製造拠点やアウトソーシングの場に止まっている今日のハンガリーの産業事情との落差にも注意を促している。

第4章は、同じく「第二次産業革命」期におけるガンツ社の内燃機関開発を、近代ハンガリーにおける高等技術教育機関の成立過程と結び付けて考察している。これによれば、ハンガリーでは、18世紀末に工科大学の前身が創立されるなど工業化の始動前から高度技術職の養成が進められ、19世紀末にはブダペシュト工科大学出身者が先端技術開発や工業大企業の経営に携わるようになった。ブダペシュト工科大学実習作業場が、高度の「産学連携」を実現する高い水準の実験室となったのは、ハンガリーの近代科学や高等技術教育の先進国レベルでの蓄積を前提としていたことによる。ハンガリーの機械工業・電機工業の先進的發展は、まさにこの蓄積に基づくハンガリー工業技術水準の高さを前提としていた。著者はこのようにして、「第二次産業革命」の担い手が米独等の再業界に限られなかった事実を明示し、改めてハンガリーの「第二次産業革命」への貢献とその前提となる技術教育および産学連携の意義を強調している。

終章では以上の本論が総括される。これによれば、製粉業は、繊維工業の発展を欠いた19世紀ハンガリーにおいて繊維工業に代わって産業革命の中心部門となったこと、製粉業を主導したブダペシュト製粉業における工場制度の確立過程こそ、ハンガリー産業革命のもっとも重要な局面であったこと、製粉業を母体として機械工業が興隆し、世界最先端の「新産業」を生み出し、また「大工業化」始動前からの高度な技術職養成やブダペシュト工科大学出身者が工業大企業の経営に携わるようになった過程に、製粉業を機軸とする産業革命に固有な同時代的かつ歴史的産業連関の系譜が見いだされること、以上である。これにより、製粉業を要的位置におく同時代的・歴史的産業連関を通じたハンガリー産業構造の高度化として、ハンガリー産業革命の見取り図が定式化された。これとともに、19世紀後半のハンガリーが工業国として高い技術水準にあったことが明らかにされ、近代ハンガリーを農産物輸出に特化した後進国と捉えてきた研究史の修正が求められている。最後に、同国産業革命研究の深化にとって不可欠な「農業革命」の分析を含む今後の課題についての展望がなされている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、19世紀ハンガリーの産業革命を、ブダペシュト製粉業における工場制度の確立過程を軸に、これと踵を接して創設される機械工業の代表的企業ガンツ社の発展と「第二次産業革命」期におけるその飛躍までを射程に入れて、一貫した視角から析出した力作である。ハンガリーの社会経済的發展については、19世紀に至るその農業国としての後進性と第二次世界大戦後の発展の停滞性が強調されてきた。しかし、本論文は、このような研究史を根底から見直し、上述の視角から、ハンガリーが19世紀に産業革命を経てヨーロッパ先進国にひけをとらぬ内容を持つ高度の工業化を実現した事実とその基本的筋道を解明したのであり、ここに本論文の独創性が表れている。

この場合、第一に、本論文の独創性が最も際だっているのは、主題である産業革命の分析視角である。すなわち本論文は、産業革命に関する通説とは異なり、産業革命の基軸を繊維部門に見るのではなく、ハンガリーにおいては、農業的産業構造をもつ同国の経済的条件に適合的な、製粉業こそがその基軸をなすと捉えたことである。製粉業に、産業革命によるハンガリー社会経済の根底的変革の推進力を見いだした視角は極めて独創的であるとともに卓抜な着想でもあると言ってよい。

第二に、本論文は現実にも、上記の視角をもって、ことに製粉業を軸としたハンガリー資本主義の成立と発展過程を、まず、製粉業の中心をなすブダペシュト製粉業における工場制度ないし資本・賃労働関係の成立の分析を通じて明らかにし、次いで、ブダペシュト製粉業の資本制的編成替えを起点としつつ、同時代的産業連関ならびに歴史的産業連関によって機械工業・電機工業が成立した飛躍的に発展した過程、言い換えれば産業構造の高度化の過程の分析を通じて明らかにしている。これによって、19世紀ハンガリー工業化のいわば基本的筋道を析出することに成功していることも、高く評価される。

第三に、本論文が、ハンガリーにおけるそうした産業革命ないし資本主義の成立と発展を、ヨーロッパを中心とする国際的空間構造に位置づけて解明したことも、貴重な貢献となっている。本論文によれば、ハンガリーは資本輸入国であると同時に食料・原料供給基地の性格を、言い換えれば農業国としての性格を残すとはいえ、経営資源・技術・資本・市場等において西方ヨーロッパと緊密な連関をもちつつその中で工業化を果たし、しかもその工業製品の販路をこれら西方ヨーロッパ諸国に求めるに至った。この分析は、一方では、いわゆる「リスト問題」の延長線上に19世紀末・20世紀初頭のドイツで大規模に展開された「工業国論争」——農業国の工業化とそれによる先進工業国の工業製品の販路の狭隘化や食料・原料調達

の危機、したがってまた農工国際分業体制維持の困難性をめぐる論争——の対象でもあった、同時代の農業国工業化の動態とその独自性を、ハンガリーの事例において明らかにしたことになる。本論文の分析結果は、その意味での貴重な事実発見ともなっているのである。同時に他方では、本論文は、工業国論争の対象である農業国工業化の動態を、工業国論争では必ずしも十分な検討がなされたとは言い難いヨーロッパ先進諸国との多様な連関を踏まえつつ明らかにしている。この解明自体も、工業国論争が提起した、19世紀末の資本主義世界経済の構造を理解するための、貴重な貢献に属するといえる。

第四に、著者が、本論文をハンガリー語の一次史料・文献をいわば自家菜籠中のものとして渉猟しつつ執筆したことも特記されてよい。信頼に値する著者のハンガリー語の深い読解力をもってする本論文は、そのことにより少なからぬ事実発見をもたらしているのである。このこと自体、中東欧における経済動態の把握にとって貴重な寄与をなすと行ってよいであろう。

とはいえ、本論文には、今後さらに検討すべき研究課題も残されている。

第一に、ブダペシュト製粉業における工場制度の確立によってもたらされた社会的変革やそれによる産業革命期の産業連関の波及効果は、なお実証的に分析し尽くされたとは言い難い。ハンガリーの産業革命像をより明確にするには、これらはさらに深く追究されるべき重要な論点に属する。

第二に、本論文では、ハンガリー産業革命の前提となるギルド規制や（半）封建的土地所有との関連で、ブダペシュト製粉業を成立・発展させた産業資本家がどのような社会的勢力を代弁していたのか、ハプスブルクの重商主義政策はブダペシュト製粉業の発展に対してどのような位置にあったか、要するに、ハンガリーにおける封建制から資本主義への移行は、経済的・社会的にどのように展開したのか、という問題についての論述がなお不十分である。

第三に、ハンガリー産業革命ないしハンガリー資本主義の形成の特質は、中欧他地域との、とくに同じオーストリア＝ハンガリー二重帝国内の他地域との相違点・共通点に関する比較を行うことにより、一層明確となるはずであるが、これについての言及も、本論文においては不十分なままである。

第四に、ガンツ社のような先進企業がハンガリーに成立し得た根拠に関する説明も、さらに付け加えられるべきである。これは、19世紀のハンガリーに「二重経済」が形成され、ブダペシュトは一種の「欧州都市」（ないし「グローバルシティ」）の性格を持ち、ガンツ社はそれに対応していわば「欧州企業」の成立を示すと見なせるか否かという、後進国ハンガリー工業化の性格をめぐる問題に対する解答として必要であるからである。

とはいえ、以上の論点の殆どは、上記のように今後の研究課題として詰めるべき点を示したものであって、本論文が達成した、独創性あふれる学術的価値をいささかも損なうものではない。よって本論文は、博士（経済学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお、平成19年2月2日に論文内容とそれに関する試問を行った結果、合格と認めた。